

東獨におけるヘルダー研究

吉 田 次 郎

「ドイツ民主革新文化同盟」(Kulturbund zur demokratischen Erneuerung Deutschlands)の出している月刊誌「アウフバウ」は一九五四年七月號をドイツ文學史のための特輯號にしているが、そのなかの數人の筆者は申し合せたように、よい文學史の缺乏している現状を訴えている。つまり、大學やギムナジウムの教師がその講義の參考にできるような、學生にその勉強の指針として示せるような、生徒に教科書として與えられるようなドイツ文學史が一冊もないというのである。これはおどろくべきことだが、事實、私の知るかぎりではマルクス主義の立場から書かれたドイツ文學史というものは今にいたるも公刊されていないようだ。ルカーチの *Skizze einer Geschichte der neueren deutschen Literatur, 1953* にしても、そこに在來の定説ないし成見をうち破るするとい洞察がふくまれているとはいえ、やはり細部の仕上げを今後にまつ素描の域を出ていない。

もちろんこの著作は、未開拓の分野にゲルマニストたちによってこれから行わるべき仕事のために、その一指標たらんとして書かれたものに違いない。が、文學史の本格的な書き直しという仕事は容易ならぬ大事業で、史的唯物論といつても根本の視點が與えられているだけで、それによりかかって性急に體系構築をやつてのけると、えてして粗雑な裁斷に陥りがさるまる。Paul Reimann, *Hauptströmungen der deutschen Literatur 1750—1848, 1956*

なども、貴重な發掘がなされているとはいへ、やはりこの弊をまぬがれていないようだ。當然のことながら、そこには資料の十分な蒐集と整理と考證、土臺の歴史的境位およびそれと上部構造との相互關係の把握、各作家が見いだした觀念的素材（自國のも外國のもの）の調査、本來の作品テキストの検討と精讀など、ちょっと考えただけでも骨が折れて尻ごみしそうな作業が要求されているのである。もとより一個人のなしうるところではないから、新しい文學史という大建築をうちたてるためには、どうしても個々の綿密な作業の分擔が必要なわけで、東獨のゲルマニストたちの仕事も現在この段階にあるものと推察される。

その一例として、ワイマールの *Nationale Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur* という機關では、研究の中心を古典主義時代（疾風怒濤時代もふくめて）において、個人又はグループがそれぞれのテーマを受けもって、総合的な研究がすすめられているようである。その個々の成果は、*Beiträge zur deutschen Klassik* と稱するシリーズのかたちで刊行されつつある。その著者の一人で、あとで紹介するはずのシートルペ（Heinz Stolpe）は、疾風怒濤文學運動の社會的發生を究明するにさいして、今までこの問題と徹底的にとりくんだ經濟學者や文學史家が一人としてなく、したがって單に參照を指示すれば足りるような精確な社會史的文獻がないところから、一九五〇―五一年の冬ワイマールで、ゲーテ・シラー文庫と古典文學研究所の所長たるシールツ教授（Gerhard Scholz）の指導のもとにゲルマニストのために行われた特別課程における共同作業で得られた史料にたよらねはならなかった、そしてその際ゼミナル・グルッペ、*Ökonomische und soziale Quellen* の抄録や記録やプロトコールを利用したと斷っている（Vgl. H. Stolpe, *Die Auffassung des jungen Herder vom Mittelalter*, 1955, S. 227）。こういう基礎から始める地味で着實な研究は、當然といえば當然かも知れぬが、從來マルクス主義の立場をとろうとする文學研究がとかく公式的に傾いて、實證性に乏しいうらみがあったのにくらべると、漸く正道を踏みだしたと言ふべきだ。

東獨で出版される文學研究書は、したがって今のところは個々の作家の特殊問題に關するものが多く（一作家の作品や生活を全般的に考察した傳記風のものもあまり見あたらない）、精々ひろげて或る時期の文學潮流の考究にとどまっている。そのなかで、とくに目立つのはヘルダーに關する研究で、それによつても東獨における文學研究の行き方の一端が分るかと思うので、以下これについて報告したい。

東獨のヘルダー研究者たちもヘルダー著作のテキストとしては、やはり Suphan の全集によつてゐる。從來最良のテキストとはいへ、一八七七一—一九一三年の古い全集で、正書法や句讀法なども手稿のそれに従つてゐるから、だいたいが飛躍的に讀みづらいヘルダーの文章がよけい讀みづらい。ドイツ人でも今のひとには、この點だけでも親しみにくいのではなからうか。研究者たちを推しすすめている動機は、今まで蔽われ歪められていた遺産の發掘と、その正しい像の定着ということにあるのだから、そこには當然ながら、その遺産の撰取という目的もふくまれているわけで、一般にも普及させるためには、正しいうえに更に近づきやすいテキストが提供されてよいはずだ。しかしこのことは、全集またはそれに近いかたちでは未だなされてゐない。その計畫も今のところないようだ。ハイネの全集さえ、待望されながらその緒にもつかないのは、やはり東西の分裂に禍いされているためらしい。手稿その他の資料の提供という第一歩からして互いの協力が得られぬという有様である。

ヘルダー著作のテキストで今までに刊行されたのは、私の知るかぎりでは、*Helders Werke, 1957* 及び *Zur Philosophie der Geschichte, 2 Bde 1952* と *Kalligone, 1956* の三種類である。

第一のものは上述のワイマールの研究機關の依頼でブーフワルト、マイヤー、シュトルへの監修のもとにボヘック (Wilhelm Bobbeck) が編集した五巻の選集である。第一巻は詩、旅日記その他、第二巻第三巻は言語・藝術・文學・哲學・歴史に關する主要な論文、第四巻は *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* の抜萃、

第五卷は *Briefe zur Beförderung der Humanität* の抜萃およびその他の小論文を收め、簡單ながら註釋もついでる。

第二のものは歴史に關する論文（宗教・文藝・言語の歴史もふくめて）の主なものを選んで二卷に收めたもので、第一卷はリガ時代のものから（一七六四年より）フランス大革命後（一七九九年）までのものを四つの時期（リガ、フランス旅行・シュトラスブルク、ビュッケブルク、ワイマール）に分けて年代順に並べ、第二卷は *Ideen* を短縮して一冊にまとめたものである。ハーリヒ（*Wolfgang Harich*）が編集したもので、巻頭には彼の *Herder und die bürgerliche Geisteswissenschaft* という長い論文がついているが、これについてはあとで觸れる。

Kalligone はカントの美學に對する反論、つまりヘルダー自身の美學であつて、上述の *Beiträge zur deutschen Klassik* のテキスト第一卷として刊行されたものである。編纂はこれもあとで觸れるヘーゲナウ（*Heinz Begenau*）がやっているが、まだ入手してないので、その詳細を述べることができない。

なお新しい研究書ではないが、一九五四年にかのハイム（*Rudolf Haym*）の浩瀚な傳記が、ハーリヒの編纂によつて完全なかたちで再刻されている。在來のヘルダー傳のうちから、約八十年も昔に出たこの書がとくに選ばれたのは、それが尠大な資料や文献の嚴密で堅實な検討の上に成つた本格的な研究として群を抜いていること、扱われた文献の内容のかんどころを正確に、かつ巧みに紹介していること、全體の構成がよくまとまつていて、文章も適確で迫力があつて、読みものとしてもすぐれていることなどの長所のはかに、著者がリベラルな學問的傳統の上に立つていて、帝國主義以後の文學研究に多く見られるような、對象の反動的な歪曲化から免れているために、學問的業績としてポジティブなものがそこから汲みとれるというのが最大の理由となつている。もちろんハイムは三月革命期の民主主義者として出發しながら、この傳記を書いた頃には、ビスマルク時代のいわゆる國家自由主義（*Nationalliberalismus*）の影響下にあつたから、そこに彼のヘルダー觀にたいするハーリヒの批判が入りこむ場所があるわけで、

讀者の注意と批評的態度をうながす意味もあって、巻頭に彼の詳細な序文がついている。五章にわたって、I Zur Frage des Erbes in der Literaturwissenschaft. II Rudolf Hayms Leben. III Zur politischen Ideologie Hayms. IV Zur philosophischen Entwicklung Hayms. V Zur Kritik der Herderbiographie. どれもそれ標題の示すようなテーマが論ぜられている。

さて本題のヘルダー研究についてであるが、それらはヘルダーを Aufklärer と見る根本のところでは一致している。この見解は、疾風怒濤運動を啓蒙思潮のアンティ・テーゼと見て、ヘルダーをその理論的指導者とみなしたり、あるいはそれと連關して、ドイツ浪漫派の先驅というべき民族的非合理主義者と見る従來の定説ないし成見と眞向から對立するものである。問題はしたがってこの主張の實證性いかんということになると思うが、ここでまず斷っておかねばならぬのは、Aufklärung とはブルジョア革命を準備するイデオロギーであり、したがって市民階級が封建制にたいして遂行する解放運動がその基盤となつてゐるといふ、そういう觀點に研究者たちが立つてゐることである。この前提は間違つていないと思うが、この一般的な前提のうゑに、次に十八世紀後半のドイツの特殊事情が問題となり、そしてそこにヘルダーの思想と仕事の歴史的位位置が定められることになる。その筋道のうゑで、個々の見解の相違が生れてゐるのである。

そこで以下に直接ヘルダーに關係ある二三の研究をえらんで、その論旨を要約することにする。

— W. Harich, Herder und die bürgerliche Geisteswissenschaft, 1952.

先ず哲學と科學の歴史におけるヘルダーの地位から主要な點を取りだすと、近代民族學の創始者、啓蒙主義の言語哲學者、聖書批評の促進者、ドイツ古典哲學の先驅者（汎神論、自然哲學）、啓蒙主義の歴史哲學的業績とヘーゲル

の史的辯證法とを結びつける歴史哲學者ということで、哲學の歴史におけるヘルダーの重要性は異論の餘地がないのに、彼の哲學上の業績は今日まで殆ど知られていない。ヘルダーの仕事の無視ないし等閑視は十九世紀前半すでに存していたが（浪漫派はたくさんの刺戟を受けているのに、ヘルダーに言及することを避けている）、とりわけこの世紀の後半、ブルジョアジーがプロイセンの絶対主義と妥協して、みずから反動化するにいたって、ブルジョア科學はヘルダーを忌避する十分な理由をもつようになった（プロイセン絶対主義にたいするヘルダーの憎惡、總括的世界觀に達しようとする彼の努力と、新カント派の、哲學と實證科學との峻別、自然と歴史とを統一的な法則に支配される一つの全體と見、とくに進歩を歴史の法則と見る歴史觀など）。

ところがドイツが帝國主義の段階にはいった二十世紀はじめ頃から、急にヘルダーが「再發見」され「再發掘」され、それは流行にさえなるにいたったが、この流行の役目はドイツ哲學を非合理主義的に神話化して、それに國粹的なモチーフを附與することであつた（浪漫主義をドイツ的本性にふさわしい世界觀の運動として、またライブニッツ、ヘルダー、ゲーテ、ヘーゲルなどを、非合理主義的なドイツ精神の證人であるとして解釋しようとする試みなど）。そのさいヘルダーにとくに興味をもたれたのは、第一に十八世紀の社會的學問的前提が未發達であつたことと彼の哲學に形而上學的唯物論のモメントが強いために、その辯證法がヘーゲルのそれに比してはるかに混亂し、概念的に明瞭でなかつたこと、第二にドイツの思想史と十七、八世紀西歐の哲學との複雑な關係を、啓蒙主義誹謗の意味で解釋しようとするさい、ヘルダーの主要著作がフランス革命前に書かれているところから、彼に興味を集中したためである。

例えば、排外主義の要求に呼應して、啓蒙主義は根本のところ非ドイツ的な現象であり、ドイツ人の民族意識を促進した十八世紀の思想家たちは啓蒙主義の敵であつたと説明し、またデカルトからアンシクロペディストにいたるフランス哲學の根本要素の一つが合理主義であるところから、非合理主義を、又は彼らがそうみなしているものを、ドイ

ツ的な反抗運動として讀えるというのが新しい解釋家たちの常套的な方法であり、そこでヘルダーが啓蒙主義の悟性にたいする「感情の反逆」の指導者とみなされるということになる。ところがスピノザはじめ英佛獨の啓蒙主義者たちの思想が彼にどれほど強く影響し、かつ有効にはたらいっているかは、彼の神學、自然哲學、歴史哲學、教育、政治等の著述がはっきり示しているところであるが、さらにフランス革命以後の新しい政治的精神的境位にたいする彼の態度を見るならば、彼がどれほど首尾一貫した、それ故に大革命によって追い越された革命前期の啓蒙主義者の立場に立っていたかが判明する（テロ化したジャコバン派も執政官政治も拒否したこと、カントの批判哲學およびフィヒテ、シェリングの思辯哲學を拒否したこと、ジャン・パウルをワイマール・クラシックより上位においたこと、ゲーテのパラッドにたいする道學者的批評など）。

ヘルダーには、「感情」の名において悟性をおとしめようとするような徴候は何一つない。その言語哲學で彼は、人間の動物との差異をその「意識の清明さ」に見ており、人間は有機體としての機能からその精神的な生の表現にいたるまで一貫して理性の活動に依存するという立場にたっている。彼が攻撃したのは、悟性を獨立化してその肉體的・心理的基體から離してしまふ學說なのであり、彼は理性と感情とが不可分であることを理解せよと要求したのみならず、本能と感情を人間の生の表現の全體の一部として認識したのである。このことは、ヘルダーがイギリスの經驗論やフランスの感覺論・唯物論における感情や激情や欲望の分析に近づいていること、感情生活を教育の過程にとり入れることを唱えたルソーの説を更に發展させていることを物語るもので、彼が感情の名において「偏頗な啓蒙主義の悟性」に反逆したというような主張は何の根據もない作りばなしにすぎない。

情勢の進んでいるフランスでは舊體制にたいするはっきりした統一戦線が形づくられるが、社會の發達がおくれ、市民階級が弱體で、國が分裂しているドイツでは事態ははるかに複雑で、啓蒙主義も種々の發展段階を通過した。そしてそれぞれのより進んだ段階を代表する思想家たちは（例えば六〇年代から八〇年代までのレッシング、カント、

ヘルダー、ゲーテ)、彼らの先行者にたいする批判を通じてのみ自己の立場をはっきりさせることができた。そこで啓蒙主義の内部での流派の論争が起る。その流派の一つを啓蒙主義そのものと解するとき、そこに誤解が生ずるのである(例えばヘルダーの理神論批判を反啓蒙主義と考えるような)。

ドイツの諸關係の倭少さと狭隘さのために、その啓蒙主義も俗物性を完全に免れなかったし、徹底した無神論と唯物論に進みえなかったが、しかし他方では後進性ゆえの利點もあった。西歐の思想家たちの成果と設問の上に立って前進できたこと、哲學上の運動が直接に革命的な實踐に轉化しないドイツでは、西歐の啓蒙主義が未解決のままにしておいた問題を徹底して考えぬけたこと、英佛の哲學者が閉却した多くの分野が總括的に考究されたことなどである。ルソーの思想をヘルダーが更に發展させたことはその一例だ。ルソーの思想の革命的な性格は弱められたが、ルソーでは全く抽象的だった「自然人」の理想化は、ヘルダーにあっては文化の原始形態の具體的な探究によって、言語哲學と民族學とをより高い段階へあげる機縁となり(「言語の起原について」(一七七〇年)など)、ルソーの民主々義的傾向はヘルダーを刺戟して民衆の文化創造の寶庫を發見せしめ、ルソーの辯證法的な歴史觀が抽象的一般的なカテゴリーにとどまっていたのに、そこにあらわれている社會生活の矛盾へのおぼろげな豫感を、ヘルダーは豊富な歴史知識を驅使して具體的なものにして(「人類育成のための歴史哲學の一例」(一七七四年)など)。

以上は内容の要約というより、その一斑を紹介したにすぎぬことになったが、なお啓蒙主義の敵としてのヘルダー像をつくりあげるのに好んで利用される彼のビュッケブルク時代の著述に關するハーリヒの見解は、あとでシュートルペの研究書を紹介するときに觸れよう。

これは同じ著者の Rudolf Hayn und sein Herderbuch, 1955 に収録されている論文である。この書は既述のハイム「ヘルダー傳」のハリヒの序文に、この論文を加えて別に單行本として刊行されたものである。

カントとヘルダーとの關係は今日は大抵、八〇年代九〇年代の兩者の論争の點からのみ見られている（ヘルダーの Ideen にたいするカントの批評、カントの認識論と美學にたいするヘルダーの反論、Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft, 1799, Kalligone, 1800）。しかしこの論争が結局は統一的な運動、すなわち全體としてのドイツ啓蒙主義の内部での流派の對立であることを見落してはならぬ。なぜならカントの批判哲學もヘルダーやゲーテの汎神論も、ウォルフ流の形而上學へのたたかいから發展し、ともに神學から自然を奪いとして、それを自由な經驗科學の研究の場たらしめようとする傾向を示しているからだ。

ヘルダーはケーニヒスベルク大學生時代にカントの Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels, 1755 から深い影響を受けたが、その事實を示す文献がヘルダーのその後の業績にたいして、またドイツの哲學にたいして持つ意義は從來なんらの評價も受けていない（その文献については、ズーファンの全集第十四卷六五四頁以下、第三十二卷二七頁、第一卷一一六頁参照）。太陽系の星雲生成説を唱えたこのカントの假説は、地球と太陽系の時間の經過による生成を示して、科學を神學の束縛から解放した點で劃期的な意義をもつが、この假説からは一切の自然現象の發展史的な自然觀はヘルダーの著作に明瞭にあらわれているが（とくに Ideen の第一部）、カントから出發したこの線はさらにゲーテの自然觀を経てシェリングの自然哲學にまでつながっている。

次にこのカント・モチーフと、ヘルダーに見られる辯證法的な史觀の萌芽との關係であるが、萬人に高く評價されている彼の歴史感覺には、もとよりそれを可能にさせるドイツの特殊な社會的條件があった、しかし、社會的條件が自動的に史的辯證法的なものの方を生みだしはしない。

ヘルダーをしてあの歴史哲學的業績を可能にさせたのは、ライプニッツの個性原理と、就中カントの「一般自然史」という二つの思想的媒介であつたとわれわれは考へる。後者によつて得られた視點、つまり現存するものの變化の可能性と必然性とを洞察する眼は、過去のものを現在の尺度で測る偏狭さから觀察者をまもつてくれる。その點でヘルダーは、この偏狭さからぬけきれなかつた先行の啓蒙主義者にまさつており、彼の歴史的理想力、その感情移入能力は、時間的にも空間的にも最も速いものに入りにまで入りこむことをよくさせた。そのさいあの視點をライプニッツの個性原理と結びつけて、それぞれの時代・民族・文化の段階をその特性において把握しようと努めてゐる。このようなヘルダーのカント摂取とその歴史への適用は、ドイツの國民文學創造のための彼のたたかいたと同じく、當時のイデオロギー上の階級闘争の課題であつた史的發展の諸問題に、彼が眞剣にとりくんでいたことを示すものである。

ヘルダーが唯物論者でも無神論者でもなかつたことは誰でも知つており、彼の思考が常にある宗教的な視野に限られてゐることはわれわれも否定しない。が、若いカントのあの著述が「世界外からの第一撃」というニュートンの假定を反駁するものであること、そしてヘルダーの自然進化の見解が、神學的世界像へ科學をしばりつけていた形而上學的偏見と、客觀的にきびしく對立するものであることをわれわれは主張する。そしてこの自然觀が、ヘルダーの助成したあの新しい歴史意識のうちにその有機的な補足を見いだしたのであつてみれば、啓蒙主義の敵ヘルダーという傳説がいかに根據のない錯覺であるかが分るであらう。

III H. Begeanu, Grundzüge der Ästhetik Herders, 1956.

これは上述の *Beiträge zur deutschen Klassik* の第二卷として刊行されたものである。

十八世紀後半、國際的な規模で起つた封建制にたいする人民の反抗は、ドイツにも七十年以後の諸方の農民蜂起と

なつてあらわれた。しかしこの國には、そういう人民のたたかいと不可分に結びついて國家的統一の問題があつた。すぐれたドイツの思想家たちは、人民、とりわけ農民の境遇や、商業・産業に加わる桎梏と關連して、國家統一の問題が自國の最も重大な課題であることを認識した。そこで統一のためのたたかいは、先ず民族意識のための、國民的藝術のための、理論や藝術におけるたたかいとなつて開始された。思想家たちのなかに民衆への接近という現象がすすむ（ウィンケルマン、レッシング、ゲーテ、ヘルダー）。とりわけヘルダーが素朴な働く人々に同情をもち、そこに眞の國民的傳統の寶庫を見つけ、統一された祖國への深いあこがれを見さだめたことは、彼のあらゆる分野にわたる知識とあいまつて、統一のためのたたかいに指導的な地位を占めさせた。

ヘルダーの歴史觀を究めてみると、その民主主義的な見解のうちに、彼の思考の反宗教的唯物論的な要素をみとめさせる哲學的基礎が明らかになる。彼のあらゆる著作に立證できる根本において無神論的唯物論的な思想のあゆみはとくに『Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele, 1778. Gott, Einige Gespräche, 1787. Verstand und Erfahrung, Vernunft und Sprache, Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft, 17

89. の三論文に總括されている（ハーリヒの見解との相違）。にもかかわらず、ヘルダーはその活動の全時期にわたつて、「宗教なくして人間はありえない」という言葉にあらわれているような見解を洩らしている。この一見矛盾するような事實は、第一に宗教に強くしばられている大衆に、彼らの考え方や感じ方や言葉にしたがつて語りかけねばならなかつたからであり（「宗教は人間による、人間のための目的以外のものを實現すべきではない」、第二は檢閲や彼の公的地位がスピノザ主義の衣裳をとらなくては根本のところ唯物論的な見解をひろめることを許さなかつたからであり、第三にドイツの現状に反對であるようなすべての人々と連繫を保とうと努めていたからである。（彼の使う神という概念の意味は、諸物の實體、または自然である。）

さて世界は認識しうるものであり、ものに關する人間の知識は正しい内容をもつという見解をもつたヘルダーは、

美の實體もまた認識しうると考える。美の問題は彼にとって、藝術による現實の取得(Aneignung)の中心問題なのである。

ヘルダーは藝術を民衆の生活の、その世界觀の、その志向努力のあらわれと見たが、彼の民謡への深い關心、シュイクスピア讚美も根はそこから發している。„Plastik“ (1778) において彼は、美に人間という容器のなかにある諸力の表現を見、そして美とは特殊を透いて普遍が見えること、かたちであり、目的のための完全性の感性的表現であり、沸きたつ生活、人間の健康であると言っている(全集第八卷五六頁參照)。そういう美の規定は、民衆への指向なくしては不可能であらう。

フランス大革命の勃發後ヘルダーは、詩人や藝術家は民衆のことさらに、その苦惱、目的、志向によく通じていなくてはならぬと繰り返して強調している。したがって藝術の構想における第一の決定的な問題は、「藝術家は何のためにそれを構想したのか、彼の思想は何であつたか」ということであつた。そこで眞實こそ藝術作品をすぐれたものにする決定的な前提であり、形式は内容(眞實)に依存すると彼は見る。彼の美學に關する主著 „Kalligone“ (1800) は、藝術における本質的なものは形式にあると見るカントの美學にたいする反論であり、カントや初期浪漫派の對象を缺く美にたいして、美とはものの本質的なかたち (die wesenhafte Form der Sache) であるという説をうち出したものである。そしてそれは單なる反論ではなく、古典的リアリズム(ドイツ古典主義の美學)の原理の表明とその擁護なのであつた。

一切の利害 (Interesse) なしに好ましいものが美しいというカントの定義は、もの(生)から美を説き明かそうとするヘルダーの見解と鋭く對立する、それはまた生そのものが詩的で、偉大で、美しかったゲーテやシラーの美學とも對立する。またカントの趣味判斷(美的判斷)は認識判斷でないという見解にたいしては、ヘルダーは美の魅力は、それが實在的なものの取得、眞なるものの形體であることに存すると反對し、そのことによって美的判斷の普遍

妥當性と内的必然性を根據づけている。しかしカントは美的判断の普遍妥當性を根據づける必要にせまられて、超感覺的なものに關する理性概念を美學の中心的なカテゴリーにした（神の概念の面はゆげな導入）。が、ヘルダーはそういうことは科學としての美學とは何の關係もない趣味の神祕主義であると呼び、かかる藝術理論は「あらゆるリアルな知識と行爲への無智ないやがらせ、かつて生きたあらゆる善い人々、偉大な人々への堪えがたい侮蔑だ」とまで極言している。

なおカントのほかに浪漫派のあいだで（ワッケンローダー、ティーク、シュレーゲル兄弟）しばしば問題にされた「崇高」についてもヘルダーは詳細に論じている。ヘルダーにとっては、自然のカオス、その荒々しい無秩序に、大きさと威力が見られるとき、人間がその不可思議さにおどろき、怖れるところに崇高があらわれるのではない、崇高にもまた美のごとく尺度があり、それはものに關するわれわれの知識にその起原をもつ。人間的な崇高さは生、自然、現實への明確な認識とともに始つたし、自然現象の眞の大きさと威力とは、それを理解することによってわれわれに開けてくる。崇高なるものは、われわれの胸がひろがり、眼が仰ぎ見ること、われわれが努力向上すること、われわれの存在が高まることと結びついているのである。

ここにヘルダーの美學の主體的な側面が強くあらわれている。自然のまえに驚嘆するだけでなく、自然を實踐的に我がものとなし、自然を人間化した主體にたいする敬意があらわれている。

四 H. Stolpe, Die Auffassung des jungen Herder vom Mittelalter, 1955

本書は *Beiträge zur deutschen Klassik* の第一巻である。この標題は正確には、「ドイツ啓蒙主義運動の初期から革命前期にいたる發展と關連して見た若いヘルダーの中世觀」であると著者は最初に斷っている。ヘルダーの青

年期をリガ時代と疾風怒濤時代(ヒュッケブルク時代がここに入りこむ)とに分け、彼の中世觀の發展とその社會的發生とを、著者が自らに課したあの連關において、尨大な文献資料によりながら綿密に考究したものである。五百頁を越える大冊で、全體にわたって要約することはむづかしいから、著者が最も力を入れている疾風怒濤時代の敘述に重點をおくことにする。

先ずこれらの時期におけるヘルダーの中世觀に關するシュートルベの見解を概括してみよう。

若いヘルダーはドイツのみじめさの經驗や、少年時代になめた封建的絶對主義の抑壓にたいする反抗から、さらに英佛の啓蒙主義的思想家の影響もあつて、人間性の全面的な發揚という夢を、やや漠然とした「彈唱詩人時代」という原始社會に求めた。しかし早くから人間進歩の認識をわがものとしたヘルダーにとっては、この原始の時代は調和的に形成された人類の幼年期とみなされ、それに青年期がつづくべきものであった、しかるに中世の宗教的壓制はゲルマン人の文化の有機的な成長を阻み、長年にわたつてその形成を曲りくねつた道へ追いこんだ。初期のヘルダーには中世は主として精神的壓制、無智、迷信の時代と映つた。かういふ強く否定的な中世觀は、封建的な抑壓機構の主要因子である僧侶階級とその教育制度にたいする熱烈な反感の一形式と考えらるべきものである。しかしリガ移住後、彼の視野が擴大し、教師および説教師としての實踐活動が強化し、さらに文筆活動が活潑化したことによつて、彼はそれまでの固苦しい道德說教的な傾向を克服しただけでなく、その中世像をもっと緻密につくりあげ、この歴史段階もまた、そのすべての現象形態とともに必然的であつたと認識するようになった。

ドイツの不幸な現狀の發生とその克服の可能性とを把握しようという努力から、神聖ローマ帝國の歴史にたいする關心がめざめてきたが、そのさいヘルダーはそこに發達してゆく領邦勢力と、とくに市民社會の萌芽としての中世都市に注目した(ハンザ同盟にたいする強い關心)。このことはヘルダーが、過去に探したあの夢を、それが市民階級解放運動の目下の課題にとつて有效なものになるように、具體化しつつあることを明らかに示している。

ところでフランスその他への旅行と、その後のビュッケブルクにおける體驗から、絶對主義にたいする反感が大いに強まったことよつて、ヘルダーは近代の壓制政治の束縛にくらべると、中世はまだ「古代ドイツの自由」を非常に保持し、涵養さえしていたという見解に次第に移つてきた。かういふ考えは、それぞれの國の階級鬭争の狀況にもつづいて、ヘルダーほど「反宮廷的態度を示さなかつた歴史家たち（ヴォルテール、ロバートソンなど）が、近代の「秩序ある君主政治」を中世の無秩序に比して讚美していたところから、よけい強まったのである。

さらにヘルダーはローマ帝政時代を、「開化され洗練されて生意氣になつてゐるわが世紀の政治と宮廷機構の見事な原型」と見ていたから（しかも彼は家父長制にたいするローマの體制の長所を見てとつてゐる）、これを滅ぼした民族移動を好意的に見るようになった。そしてゲルマン人の侵入は「強大な運動による全人類の大治療」であること、ゲルマン文化の諸要素と社會形態とは無抵抗に吸収されてしまつたのではなく、「來るべき歴史のための西歐人の再編成」といふ長い過程のなかで酵素となつてはたらいたのであることを認識した。

中世をゲルマン的諸要素と古代末期の根強い殘渣との綜合と見るようになったヘルダーは、また中世の全期間を、「變化と努力の進行する」時代、史的發展とは諸對立のたたかひであるといふことを如實に見せてくれる時代と見るようになった（「人類育成のための歴史哲學の一例」一七七四年、「ドイツの司教らはいかにして階級代表の地位を得たか」一七七四—一五年）。これらの論文でヘルダーは、教會の機能を「中世の發酵過程の酵素」として素描し、カトリック教會制度と世俗的封建制度の發達との相互關係を分析しようと努めてゐる。そして中世の精神的道德的な諸現象が見る者を困惑させるほど矛盾にみちてゐることを指摘し、歴史家はこの時期の獨自な法則性を、現代にたいするその固有价值を明らかにすべきだと論じてゐる。われわれは、この時期のヘルダーは辯證法的な歴史觀察への大きな進歩を遂げたと斷ずることができるのである（シュトルベは、ハーリヒがヘルダーのビュッケブルク時代の諸著作にハーマンの「非合理主義的世界觀」への接近を見、ヘルダーは當時一時的な危機にあつたと「まるで申しわけのように」説明して、そ

こに大きな意義をみとめていないことを難じている)。

次に疾風怒濤運動の社會的發生についてであるが、一七七〇年頃のドイツの生産力の發達をみると、工業生産では親方の資本と生産要具のもとで行われる比較的多人數の職人の單純協業以上に出していない。問屋業の集中というかたちで資本主義發達の端緒があらわれていたが、それは流通部門にとどまっていたし、それに國の小領邦への分裂という原因も加わって、生産力の増大はさしあたり考えられぬ狀況であった。そして國民の五分の四がそれによって生活している農業生産はひどく低劣な状態にあったが、その改良も賦役、隸農、農奴制によって妨げられていた。それは國內の需要をやっとみたすにすぎなかったから、事實、七年戰爭後の十年間には中歐の廣汎な部分が度々食糧不足や飢饉に襲われた。それは農業の生産力が全社會の要求にもはや答えられぬことをはっきり實證するものであった。それは封建制の頽廢の危機であること。社會の新しい經濟的可能性や要求と古い生産關係との矛盾であること、そのことが市民階級の前衛(經濟學者、政治家、その他の思想家など)の眼に次第にはっきり映るようになってきた。そういう基盤のうえに、上昇する階級のインテリゲンツィアは新しい社會思想を生みだし、或いは先進國の解放運動のなかに生れた思想を攝取し、それを自國の狀況に應じて創造的に發展させた。封建制の腐朽の危機と對決しつつ作られるはじめ、そして市民社會の秩序に適應できるような新しい上部構造、それを創造するためのさまざまな努力の位相こそ、ドイツ文學で疾風怒濤と呼ばれるあの運動にほかならない。

一七七〇年の前後、ドイツでは農事制度や農業生産の現状を批判し諷刺し、その改善を論ずる記事や小冊子が氾濫した。事實また二三の小領邦では、フランスの重農主義を移入して、上からの農産の改良と向上が實驗された。しかしそれにはどうしても農民自身の創意に俟たなくてはならぬし、事實、自發的に農事改良に勵み、業績を上げるような農民が僅かながら出現しはじめ、前衛的な知識人の強い關心を呼んだ(例えばラーファターの「骨相學的斷片」におけるスイスの「模範農民」に關する叙述。ゲーテも七五年七月十二日ゾフィー宛の手紙で、ラーファターの感激と

意見に賛成している)。他方ではそういう生活上の必要から生れる農民の知識欲と知識階級への接近。そのことによって知識人たちは、直接生産者としての下層民の文化創造の能力に非常に注目するようになってきた。そしてこのことは、當時のブルジョアのイデオロギーに強く平民的な (plebejisch) 性格を與えることになったのである。

この時期の市民階級出身の文筆家たちに目立つのは、貴族の庇護から脱しようとする努力である。もちろん市民階級の未熟さのゆえに、とりわけ文筆上の産物を受け入れる市場が形成されていなかっただために、ヘルダーもゲーテもシラーも結局は宮廷との妥協に入ることを餘儀なくされたが、にもかかわらず彼らの自覺と獨立心は大いに高まり、次第に互いの接觸を密にするようになり (Bremer Beiträge, Frankfurter Gelehrte Anzeigen など)、宮廷に地位を求めねばならなくなったときも、グループをなして宮廷に市民的フラクシオンをつくろうとする傾向を明らかに見せていた。他方では、物資生産者を動かす必要をみとめた啓蒙主義的知識人らは、下層民、とりわけ農民との接觸の道をひらくことに努めた。

こういう傾向はリガ時代のヘルダーにすでに強くあらわれていたが、それは、フランス旅行(絶対主義の典型の國)とその後のドイツの小宮廷との接觸の體驗から、上からの保護政策にたいする斷念が生じたことによつて、いっそう強められた。そして従來の宮廷の藝術保護にたいする彼の批判は、疾風怒濤運動における決定的な一要素となった。彼こそ生活・藝術・學問における硬化した宮廷的な規矩規則にたいする反抗を、理論的に基礎づけた人であった。そして自然へ、自然なるものへ眼を向けよ、わが國民が何を考え何を感じたか、何を考え何を感じているかを國民に示せという彼の呼びかけは、青年たちのあいだに欣然たる反響を見いだしたのである。

啓蒙主義運動が初期の教訓的啓蒙的傾向から疾風怒濤の革命前期的段階へ移行してゆくに應じて、文學の形式やジャンル、またその題材にも變化が起つた。寓話風の小形式の物語は次第に減じて、戯曲のように古くから受けつがれたジャンルでも、先入の道德觀を證明してみせようとする問題劇が、人物の性格をハンドリングから展開させて、歴

史的社會的状況をその動きにおいて捉えようとする行動の劇へ變つてきた。長編小説もまた當時の庶民の生活をその動的な全體性において、そして十分に個性化して表現するように次第になってきた。また自國や外國の民衆的な遺産の研究が深まったことで、抒情詩のなかへ民謡的な要素が流れこみ、そのことが少からず與つて、眞の體驗詩へ進むことができるようになった。

題材への「小世界」の導入は世紀のなかば、とくに七十年以後目だつてふえ、「小屋がけの仲間」の無垢と勤勉と害われぬ純朴さが、惡徳と腐敗を蔽いかくす宮廷的な優雅と洗練とに意識的に對照させられた。この傾向へもヘルダーは指導的理論家として早くから參與し、ゲスナーなどの「抽象的な理想を追う」田園詩を鋭く批判したが、なお民謡採集を繰り返しかえし呼びかけ、下層から芽生える若い才能を支持し奨励したことは、この點の彼の活動のポジティブな面を示すものである。

さらに作品の主人公を見ると、その積極性の増大が目立つ。侮辱された神の名において腐熟せる支配者に怒りをぶちまける聖書および聖書外の宗教的人物、舊約聖書の豫言者、*Volkshuch* に登場する邪教徒、魔術師、それから古代神話のヘルメス、プロメテウス、さらにアハスヴェル、フェラートなど。だがそれらの形姿には、具體的な歴史的社會的環境におかれていないという缺陷があった（彼らを戯曲の筋の主要人物にしようという度々の試みが失敗したのは、このことと關係がある）。そこで當時の社會的諸問題と直接に關係する題材を捉えようという努力が強まり、いわゆる *Selbsthelfer* が登場する。このテーマの第一群は小公國の絶對主義による壓制のケースであり、第二群は中歐ないし隣接國の歴史における革命期、またはその直前の時期から取られた題材である（ニーダーランデの獨立戰爭、イタリア・ルネサンス、ドイツの中世末期など）。この點でゲーテの「ゲッツ」およびその初稿は、わが國史におけるブルジョア革命の最初の昂揚期であったドイツ農民戰爭からの取材が、疾風怒濤期の中心的な關心事を、すなわち經濟社會體制における封建制の清算、ドイツの領邦分裂の克服、人間性の全面的な發揚という課題を、藝術的に

有効に表現するのにいかに適していたかを如實に示すものである。

以上の要約ははなはだ粗漏で、なお数々の重要な問題点を逸している。ただヘルダーの古い像の破壊と新しい像の造型ということは、ドイツ文學の歴史を考えるうえでのかなめの一つだと思うので、この破壊と再興の作業がどういう方向に進められているかを紹介するため以上の報告を試みた。その方向は、私の考えでは、正しいと思う。ヘルダーの民族意識の育成と推進のための努力を、それを生んだ歴史的状況から切りはなして、帝國主義の段階の國家主義や排外主義と結びつけようとする試みは（研究者たちがそのことを意識しているか否かにかかわりなく）、實際的に有害であるということを別にしても、研究方法としても誤っているので、そのような試みによって作りだされたヘルダー像がいつまでも支配してはならぬのである。

ここに紹介したヘルダー研究に共通にみられる特色は、論旨をすすめるにすべて文献に即して、できるかぎり實證的であろうと努めていることである。それは公式的機械的にかたむきがちであった従來の行き方を克服しようとする努力のあらわれで、よい傾向と思うが、ただしペーゲナウはその點がまだ十分でないようだ。ヘルダーの無神論云々のところも、「根本のところ」という但し書きがついているにせよ、あれだけの理由では説得力が弱い。私信や、みづから著作につけた註釋では、ヘルダーは自分のほんとうの考えをかくしていないということであるが、それならば彼の世界觀の哲學的基礎として大切なところであるから、やはりそういう文献を引用して、しかしそれだけを切りはなさないで、全體との連關において實證してほしかった。ハーリヒは柔軟で、しかも鋭利な理論家と思うが、シュートルベから批判されたように、論を立てるうえでどこか氣弱な、腰のきまらないところがある。ピュッケブルク時代の著作にたいし、ハーリヒが「一時的な危機」とみなしているところに、シュートルベは史的辯證法の萌芽をみており、またヴォルテールなどの史觀にたいするヘルダーの批判について、ハーリヒはヘルダーがドイツの小宮廷にみられる

「啓蒙主義の戯畫」を西歐の原物と混同したのであるというような説明をすることにたいし、シートルペはフランス啓蒙主義者としてのヴォルテールの思想の歴史的階級的規定を分析して、ヘルダーの批判のよってくる所以を明確に指摘している。ハーリヒにしても、啓蒙主義全體の内部での流派の論争ということを言っているのであるから、ヘルダーの一見したところ反啓蒙主義的なボレミークの實態が見えないはずがないのに、ヘルダーを反啓蒙主義的に解釋したがる在來の研究者たちがその論據として最も利用するかんじんなところでよろめいているのだ。その點ではシートルペのほうがはるかに透徹しており、したがってその論旨も首尾一貫している。論者の視點がしっかり定まっているかどうか、それを徹底して貫きうるかどうかの問題であろう。(一九五七・十・九)

(右は文部省科學研究費による研究の一部である)